

世界的所得分配の不平等

岡山大学 吉田 建夫

1 目的

今日の世界における深刻な問題のひとつは世界の人々の間に極めて大きな所得格差が存在することである。先進諸国では豊かな生活を楽しむ人々が数多くいるのに対し、開発途上国には飢餓線上をさまよう無数の人々が存在する。極度に大きな所得格差の存在は、経済厚生上の観点から容認しがたいと考えられるのみならず、今日の国際関係の緊張をもたらす大きな不安定要因ともなっている。世界全体としてどの程度大きな所得不平等及び貧困度が存在し、どのように変動してきたのだろうか。本報告では、可能な限り最新のデータに依拠した計測を目指したい。計測期間は1990年から2016年までとする。

2 計測の方法

このような研究を行うためには、世界のできる限り多くの国から (i) 一人当たり所得、(ii) 国内所得分布表、および (iii) 人口の三種類のデータを得ることが必要である。各国の一人当たり実質所得及び人口データについては、国連統計委員会の勧告に基づいて実施された購買力平価に関する国際比較プログラム (International Comparison Program) 2011年ラウンドの成果 (2014年4月29日公開) を反映した世界銀行の世界開発指標を用いて当初の計測を進めた。その後2016年後半に2011年ICPを取り入れた時系列データセットとして Penn World Table version 9.0 が公表されたため、この新データを取り入れた計測と分析を追加した。各国の国内所得分布データに関しては、Soltの編集にかかわる SWIID (Standardized World Income Inequality Database) Ver6.2 (2018年3月) に依拠した計測を行っている。

問題は、上記3種類の情報からいかにして世界的所得分布を復元するかである。一般的に所得分布は右に裾野が広がる左右非対称な形状をしており、対数正規分布による近似が可能であることが広く知られている。本計測では妥当な想定として、各国の所得分布は対数正規分布に従うと仮定した。所得分布が対数正規分布に従えば、ジニ係数は所得の対数分散の単調関数となる。したがって、世界各国についてジニ係数と一人当たり所得の情報が与えられれば、各国の累積所得分布関数が一意に定まるから、これらを人口比でウェイトをとって、集計することにより、世界全体の大域的所得分布の累積密度関数を求めることができる。なお、実際の計算においては、独自にフォートランプログラムを作成し、実質所得1ドルから30万ドルまで0.5ドル刻みで求めた各国の累積所得分布から世界的所得分布を推計している。即ち、本計測の世界的所得分布は60万の所得階層から構成されている。

3 報告予定項目

当日は次のような項目に基づく分析結果の報告を予定している。

- (1) 世界的規模でみた所得分布の密度グラフの推移とその特徴
- (2) Growth Incidence Curve の推移と所謂エレファント・カーブの再検証
- (3) 様々な不平等度尺度に基づく世界的所得分布の不平等度の推移とその特徴
- (4) 世界的規模でみた貧困率と貧困人口の推移、他。